

後期・邪馬台国の時代④

～ニギハヤヒ～

河村哲夫

宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命について

順序からいえば、まず出雲に追放されたスサノオについて述べ、その後に大国主命のことを述べるのが本筋であるが、後期邪馬台国の基幹的構造と密接に関連するため、宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の関係の方から取り上げたいとおもう。

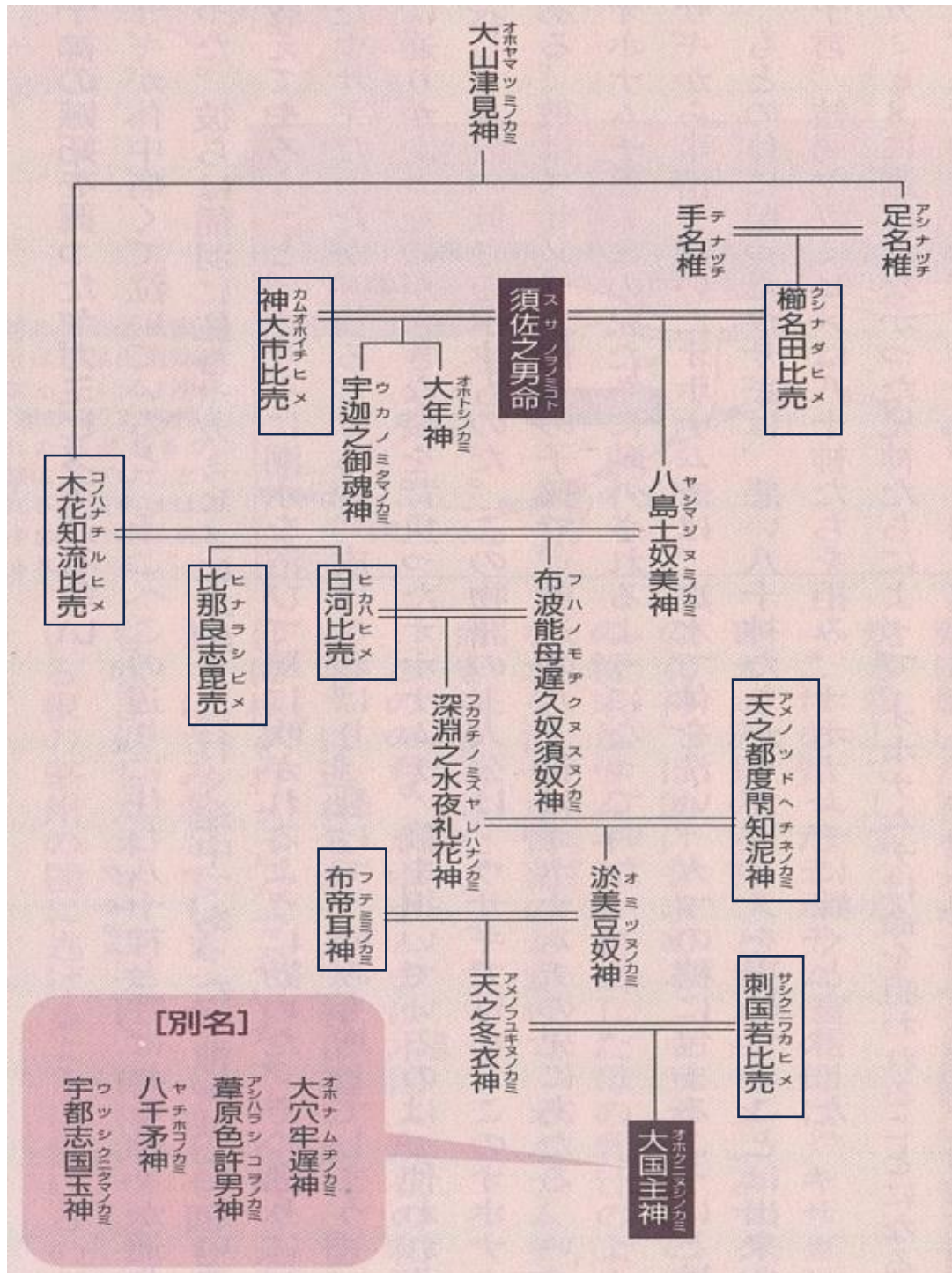
前述したように、三者の関係は次のとおりとなっている。

		妃	夫	
宗像三女神	宗像三女神	市杵島姫(天照大神の娘)	鞍手	ニギハヤヒ (天照大神とタカミムスビの孫) (天忍穗耳命と万幡豊秋津師比売の子)
		田心姫命(天照大神の娘)	出雲	大国主命 (スサノオの後継者)
		湍津姫命(天照大神の娘)		

この三者は、当然同世代のはずである。でなければ、結婚することはできない。

ところが、スサノオと大国主命との関係について、下記のとおり、『古事記』、『日本書紀』本文、『日本書紀』の一書でそれぞれ異なっている。

① 六世の孫	『古事記』	スサノオ—①八島土奴美(ヤシマジヌミ)—②布波能母遲久奴須奴神(フハノモチクヌヌ)—③深淵之水夜禮花神(フカブチノミヅヤレハナ)—④淤美豆奴神(オミヅヌ)—⑤天之冬衣神(アメノフユキヌ)—⑥大国主神(別紙のとおり)
	『日本書紀』の第一の一書	大国主はスサノオと稲田媛との児の清湯山主三名狭漏彦八嶋野(すがのゆやまぬしみなさるひこやしまの)の五世の孫 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">スサノオ・稲田媛—①清の湯山主— —【①—②—③—④—⑤大国主神】 (スサノオからは六世の孫)</div>
	『日本書紀』の第二の一書	大国主はスサノオの六世の孫
	『新撰姓氏録』	大国主はスサノオの六世の孫
② 子	『日本書紀』本文	大国主はスサノオと稲田姫の子



『古事記』の系譜(口は女性)

スサノオは天照大神の弟である。宗像三女神は天照大神の娘である。大国主命が田心姫命と湍津姫命を妃とするためには、スサノオの次世代でなければならない。スサノオの娘の須勢理毘売命の婿であるから、義理の息子でもある。よって、『日本書紀』本文が妥当というべきであろう。

六世の孫とする伝承は、母系制社会に基づく母系系譜を強引に父系系譜に置き換えようとしたことによる何らかのバグが生じた可能性がある。

あくまで仮説ではあるが、この系図に登場する女性たち——櫛名田比売・神大市比売のみならず、木花知流比売・日河比売・比那良志毘売・天之都度閑知泥神・刺国若比売などが、もし、スサノオの妃であるとするならば、彼女たちの産んだ子はすべてスサノオの子ということになる。大国主命もまたスサノオの子になってしまう。

——そんな馬鹿な。

とおもわれる向きには、ずっと後代のことであるが、神武天皇の後継者たち——初期天皇たちのことを、この際、紹介しておこう。

### 初期天皇の妃たち

下表は、第2代天皇から第7代天皇の名とその妃の状況である。

天皇名	天皇名	天皇名	天皇名	天皇名	天皇名	天皇名
孝靈天皇	孝安天皇	孝昭天皇	懿徳天皇	安寧天皇	綏靖天皇	天皇名
磯城・大目 の女 細媛	姪押媛	尾張連の祖瀛 津世襲の妹 世襲足媛	息石耳命の女 天豊津媛	事代主神の孫 淳名底仲媛	事代主神の女 五十鈴依媛	書紀本文
春日の 千乳早山香 媛	磯城・主葉江 の女 長媛	磯城・主葉江 の女 淳名城津媛	磯城・主葉江 の男弟猪手の女 泉媛	磯城・主葉江 の女 川津媛	磯城・主の女 川派媛	一書
十・市・主等が 祖の女 真舌媛	十・市・主五十 坂彦の女 五十坂媛	倭国の豊秋狭 太媛の女 大井媛	磯城・主太真 稚彦の女 飯日媛	大間宿禰の女 糸井媛	春日・主大日 諸の女 糸織媛	一書
十・市・主の祖大目 の女 細比売	姪忍鹿比売	尾張連の祖奥津余 曾の妹 余曾多本毘売	師木・主の祖 賦登麻和訶比売 亦の名は飯日比売	師木・主波延の女 阿久斗比売	師木・主の祖 河侯毘売	古事記

この表を見て、妙なことに気づかれないか。

各天皇は父から子へ継承されているはずなのに、その妃たちには父親が同じ女性たち——すなわち、姉妹がまじっている。

ちなみに、『日本書紀』に基づく各天皇の没年齢、在位年代、皇妃名は次のとおりである。

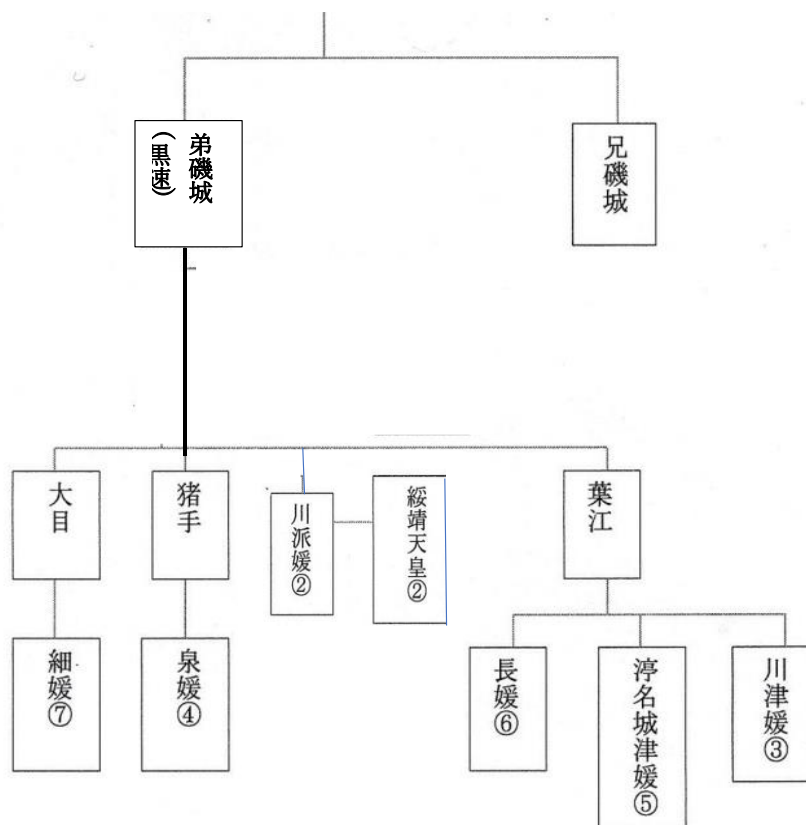
2代から7代まで366年間続いているのに、その妃たちが姉妹であるわけではない。

逆にいえば、天皇を父子継承とみたことに根本的な問題があるのではないか、ということになる。

代	天皇名(没年齢)	『日本書紀』による在位年代	皇妃名
2	綏靖天皇(84歳)	前581～前549(32年)	川派媛
3	安寧天皇(57歳)	前548～前511(37年)	川津媛
4	懿徳天皇(77歳)	前510～前477(33年)	泉媛
5	孝昭天皇(113歳)	前476～前393(83年)	淳名城津媛
6	孝安天皇(137歳)	前392～前291(101年)	長媛
7	孝霊天皇(128歳)	前290～前215(75年)	細媛
計	平均年齢(99歳)	計366年(平均在位61年)	

『日本書紀』では各天皇は父子継承とされているが、各皇妃は姉妹か従妹である。

図で示せば次のようになっている。



②第二代綏靖天皇 ③第三代安寧天皇 ④第四代懿徳天皇 ⑤第五代孝昭天皇  
⑥第六代孝安天皇 ⑦第七代孝霊天皇

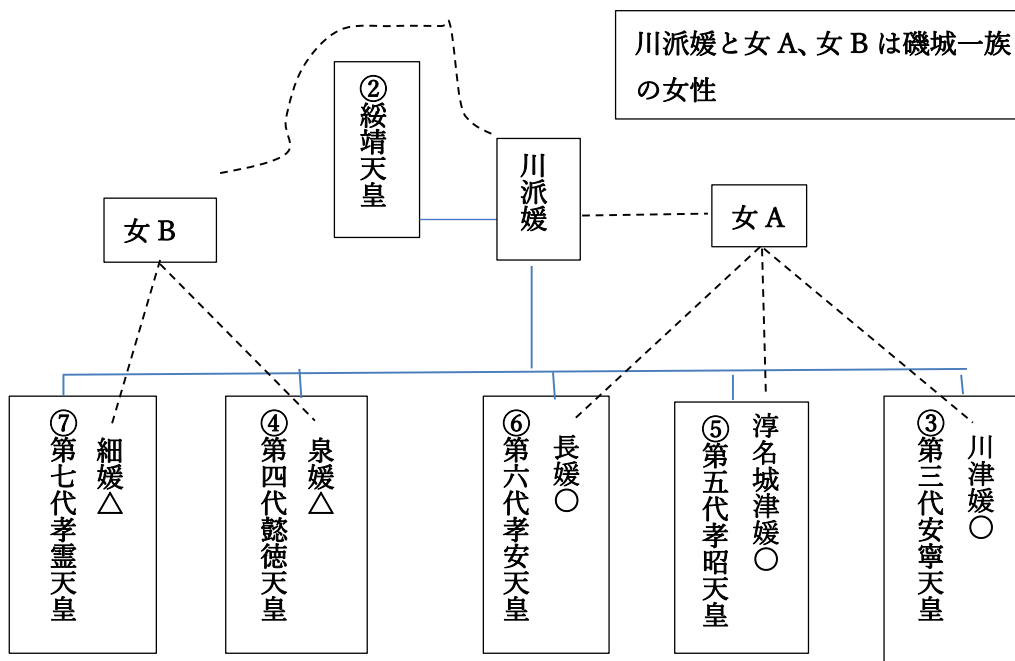
これを安本美典氏の「統計的年代論」を用いて補正すれば、各天皇の在年代と皇妃たちの関係は次のとおりとなる。

妻たちが姉妹か従妹なのであるから、各天皇も兄弟か従弟など同世代の人物となる。

代	天皇名	安本美典氏の「統計的年代論」による在位	妃名	妃らの関係		
					姉妹	姉妹
2	綏靖天皇	298～302(4年)	川派媛	叔母		
3	安寧天皇	302～307(5年)	川津媛		○	
4	懿徳天皇	307～310(3年)	泉媛			△
5	孝昭天皇	310～317(7年)	淳名城津媛		○	
6	孝安天皇	317～324(7年)	長媛		○	
7	孝霊天皇	324～332(8年)	細媛			△
計	平均年齢	34歳(平均在位5.7年)				

※○△はそれぞれ姉妹。○と△は従妹同士。川派媛は○姉妹と△姉妹の叔母

これを母系制の系図に置き換えれば、次のとおりとなる。



総括すれば、次のとおりとなる。

- ① 磯城一族の姉妹と従妹のそれぞれの婿が持ち回りで天皇となっている。
- ② 第3代から第7代までの天皇は父子ではなく、同世代の天皇ということになる。
- ③ よって、日本の古代史は母系集団を追跡しない限り、その真相は見えてこない。
- ④ なお、磯城一族について、『先代旧事本紀』『新撰姓氏録』はニギハヤヒの子孫とする。

大国主命がスサノオの六世の孫とする伝承について、母系制社会に基づく母系系譜を強引に父系系譜に置き換えようとしたことによる何らかのバグが生じた可能性が高い、と述べた理由である。

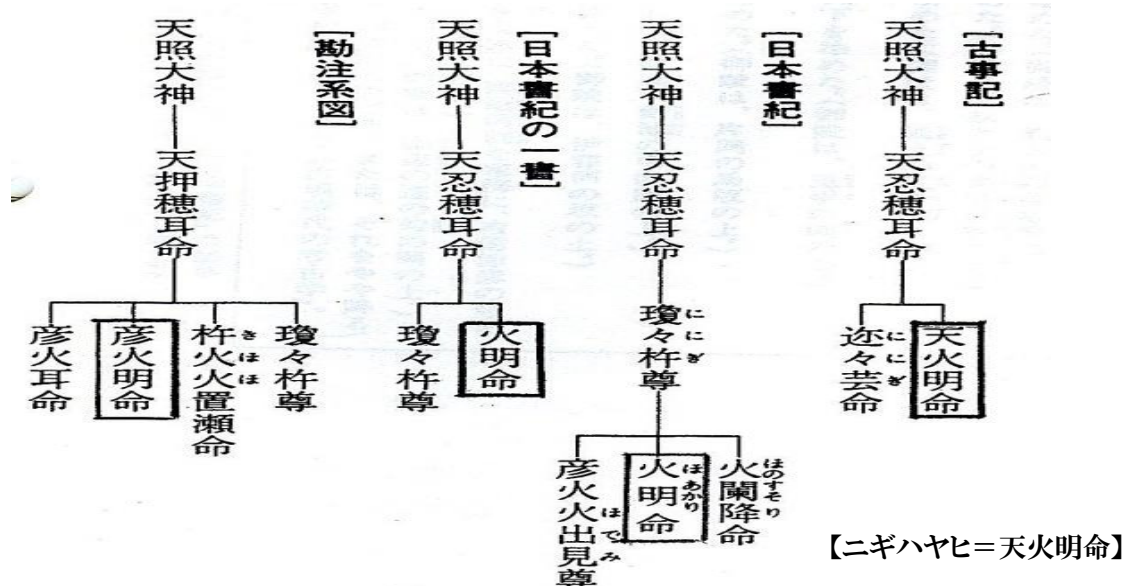
しかしながら、このことはきわめて重大な問題であり、性急に最終結論とするわけにはいかない。今後の継続的な検討が必要であろう。上に示した大国主命の母系系譜についても、あくまでも現段階における筆者の思考実験のなかの一つの試案ということでご理解いただきたい。

## ニギハヤヒ

次に、ニギハヤヒである。

天忍穗耳命と万幡豊秋津師比売の子であり、したがって、天照大神の孫であり、タカミムスビの孫でもある。

『古事記』	邇藝速日命(ニギハヤヒ)
『日本書紀』	饒速日命(ニギハヤヒ)、櫛玉饒速日命(ニギハヤヒ)
『先代旧事本紀』	饒速日命(ニギハヤヒ) 天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊 (あまてる・くにてる・ひこあまのほあかり・くしたま・ <u>ニギハヤヒ</u> ) 天火明命(あまのほあかり) 天照國照彦天火明尊(あまのほあかり) 胆杵磯丹杵穗命(いきしにきほ)
籠神社「勘注系図」	天照國照彦天火明命、天火明命、天照御彦火明命、彦火明命饒速日命(ニギハヤヒ)、神饒速日命(ニギハヤヒ) 天照国照彦天火明櫛玉饒速日命 (あまてる・くにてる・ひこあまのほあかり・くしたま・ <u>ニギハヤヒ</u> ) 膽杵磯丹杵穗命(いきしにきほ)



ニギハヤヒとニギハヤヒの関係について、『日本書紀』本文は父子とするが、他の文献ではすべて兄弟とする。

「勘注系図」はニギハヤヒを弟とし、『古事記』と『日本書紀』の一書は兄とする。

いずれにしても、兄弟とみて間違いなからう。

そのニギハヤヒが、遠賀川下流域の鞍手郡に天降りしているのである。

### ニギハヤヒを祭る天照神社

宮若市宮田町大字磯光字儀長(旧鞍手郡宮田町)に「天照神社」がある。

天照は「あまてる」「てんてる」「てんしょう」などと呼ばれている。

祭神は、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊(ニギハヤヒ)・八幡大神・春日大神・天児屋根命である。

江戸時代の貝原益軒著『鞍手郡磯光神社縁起』によれば、ニギハヤヒは宮田町の南に聳える笠置山(425メートル)に降臨したという。

**天照神社(天照宮)**

所在地 福岡県鞍手郡宮田町大字磯光字儀長  
祭神 天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊、  
八幡大神、春日大神、応神天皇、  
天児屋根命

犬鳴川右岸の宮田町磯光に鎮守する天照神社は、古代から中世に栄えた粥田荘の惣社として古くから人々の信仰を集めた神社として知られています。

天照神社の由来は、貝原益軒著の「鞍手郡磯光神社縁起」によれば、饒速日尊が垂仁天皇十六年に宮田町の南に聳える笠置山頂(四二五メートル)に降臨し、同七十七年に笠置山頂に奉祀したことに始まります。その後、千石穂掛谷、明野(脇野)と移り、延慶元年(二三〇八)年に、白き鶴の住む里に廟を遷すべしとの神託があり、西国探題惣政所玄朝の造営により、現在地に移されました。

例祭のうち、四月の春季大祭は、往時の百手祭にちなんで五穀豊穡を願い、七月に行われる夏祓祭(御獅子様)、祇園祭、夏越祭(輪越祭)は、疫病から人々を守り、農作の平穏無事のため悪霊を祓うものです。また十二月三日の恵比須祭も大変な賑わいをみせます。

隔年で行われる御神幸祭では、鶴田の日吉神社まで優雅な高張提灯行列があり、厳粛な祭の中に幻想的世界をみることが出来ます。

境内には、古墳の枕付石棺を転用したと言われる梵字板碑(不動石)や貝島大之浦炭碓の山神社を合祀した大之浦神社があるほか、八六二年(萬延二年)現在の遠賀鞍手両郡の石炭経営者に当たる、遠賀鞍手両郡御仕組焚石山元が奉納した石燈など、石炭採掘草創期の活気と賑わいを彷彿とさせてくれます。

平成八年三月

天照宮氏子会  
宮田町教育委員会

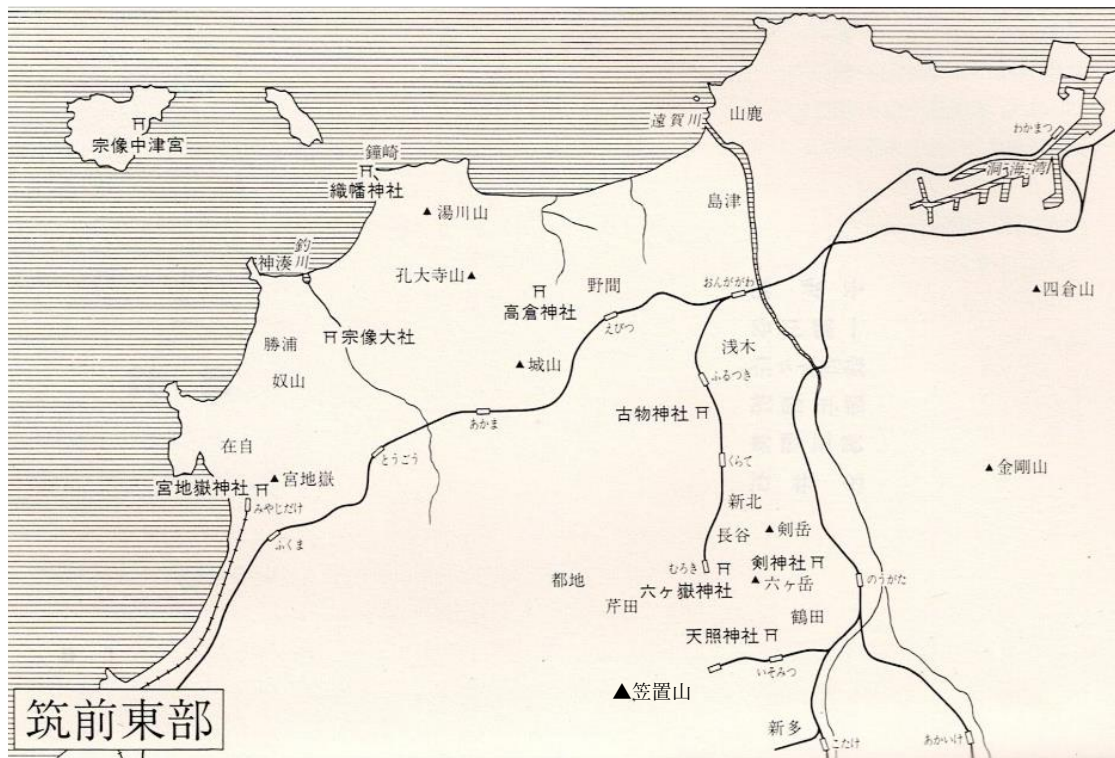
よくみれば、笠置山は、宗像三女神が天降ったとされる六ヶ岳から西南約 7 キロしか離れていない。

紀元前後の奴国の時代に、東南約 6 キロの立岩遺跡(飯塚市)で生産された石包丁が九州北部で広域に流通していたことはすでに紹介したが、その材料となる輝緑疑灰岩がこの笠置山から採取されていた。ニギハヤヒの降臨とどうい関係があるのか知らないが、ついでながら申し添えておこう。

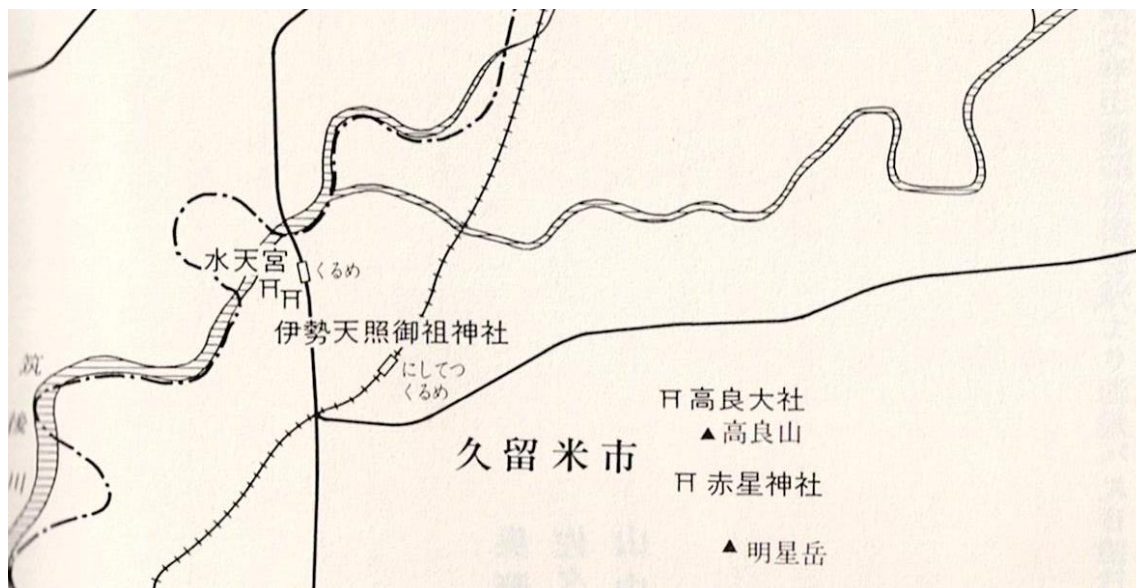
前述のとおり、宗像三女神は【筑紫平野→宇佐→豊前(京都郡・田川郡)→嘉穂郡→鞍手郡→

宗像郡]という経路をたどっている。

それでは、ニギハヤヒは、いったいどこから、どういう経路で笠置山にやってきたのか。



### 筑後地方の伊勢天照御祖神社(大石神社)



実は、筑紫平野の久留米市に伊勢天照御祖神社(大石神社・久留米市大石町)があり、天照国照彦天火明尊——すなわち、ニギハヤヒを祭っている。

『延喜式神名帳』の「筑後国三井郡三座のうち伊勢天照御祖神社」とみられている。



国名	郡名	座数	神社名	祭神
筑後の国	み 三(御) 井郡	三座 大二座 小一座	<small>たかんのたまたれの</small> 高良玉垂命神社 <small>名神大</small> <small>あまてらすみ おや</small> 伊勢天照御祖神社 <small>とよひ めの</small> 豊比咩神社 <small>名神大</small>	高良玉垂命。(相殿) 八幡大神、住吉大神。 天照国彦天火明命。

ただし、筑後地方の神社については、戦国期の争乱や筑後川の氾濫などにより、所在不明となった神社が少なくなく、伊勢天照御祖神社についても、

・久留米市御井町の高良大社内の末社とする説

・『筑後国神名帳』の三潞郡「正六位上大石兵男神」(久留米市三潞町)とする説

などもあるが、江戸時代の久留米藩の学者矢野一貞(1794～1879)は、『諸社拾実鈔』において、「社後の土中に許多(あまた)の齋瓮(カメ)埋もれたり、千年外の祭器なること疑いなし」

として、大石町の伊勢天照御祖神社を式内社に比定し、これがいわば通説的見解となっている。

現在では市街地になっているが、台地と筑後川の自然堤防の上に、大石神社遺跡・速水遺跡・南崎遺跡など弥生時代中期～後期の遺跡が広がっている地域である。

伊勢天照御祖神社の御神体は、本殿土間にある巨石とされ、この石は支石墓の上石あるいは古墳石室の蓋石とも推測されているが、江戸時代の『筑後志』や社伝は、この靈石が年々大きくなるとの伝承を伝える。石の大きさは「方九尺」、別に「方三尺」という。おそらく磐座であろうが、この地域が大石町と呼ばれるのはこの巨石に由来する。このことから、大石神社あるいは大石太神宮とも呼ばれる。

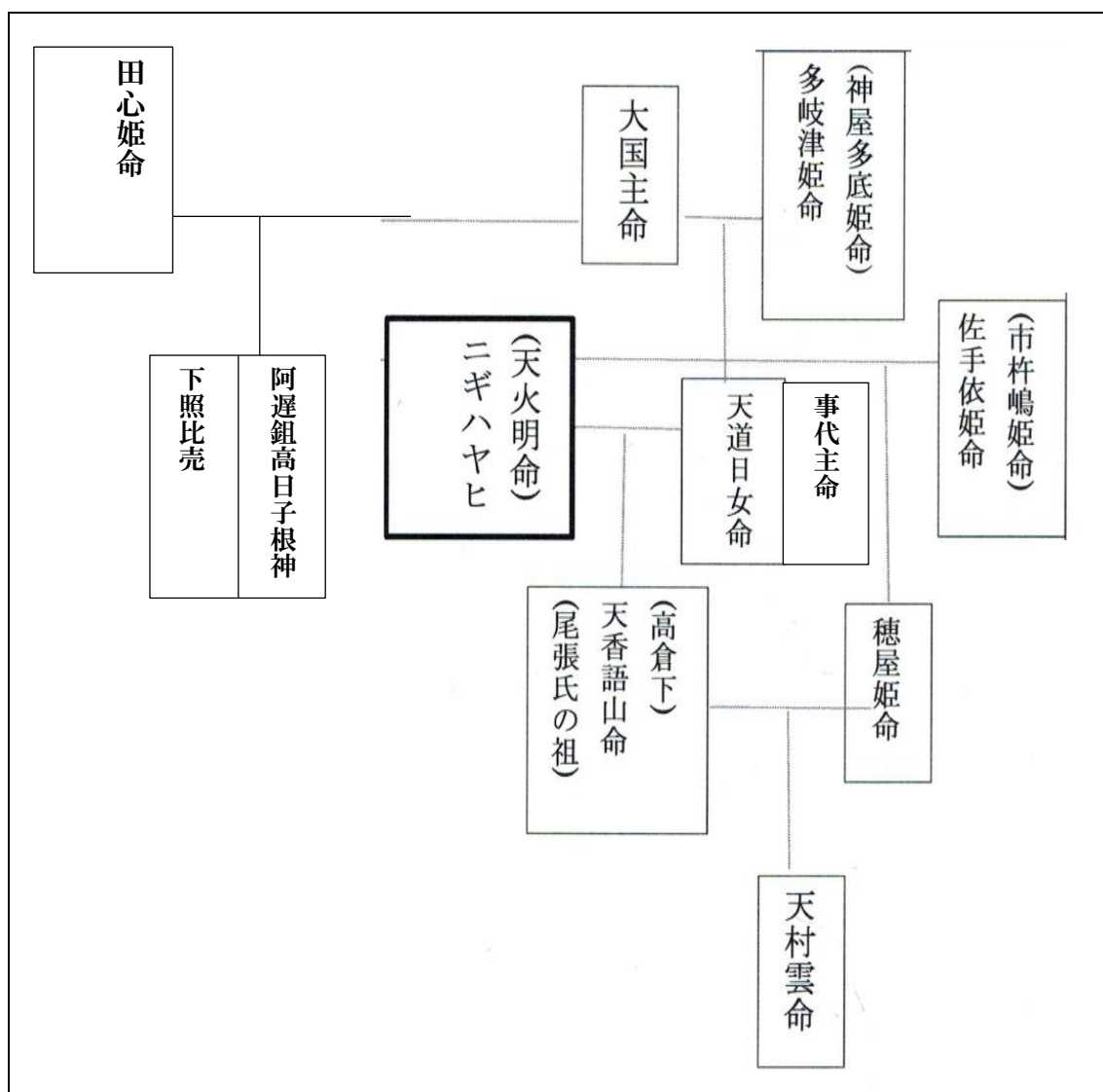
何ゆえニギハヤヒを祭神とするのか不明であるが、前述した宗像三女神と水沼氏との緊密な関係を考慮するとき、ニギハヤヒもまたこの大石の地と何らかの緊密な関係があったのであろう。



### 宗像三女神・ニギハヤヒ・大国主命の三者同盟

この三者の関係は、籠神社(京都府宮津市大垣)の「勘注系図」に詳しい。

ただし、ニギハヤヒと丹波との関係については、ずっと先の方で詳しく述べることにしているので、本稿においては、『古事記』や「勘注系図」などの情報に基づく下記の系譜を紹介する程度にとどめておきたい。



ニギハヤヒは宗像三女神のうち市杵島姫を娶りつつ、多岐津姫命と大国主命の間にできた天道日女を娶り、天香語山命(高倉下)を儲けている。尾張氏の祖である。

そして、その天香語山命は市杵島姫との間にできた穂屋姫命を娶り、天村雲命を儲けている。

結婚した天香語山命と穂屋姫命の父親は同じニギハヤヒであり、母方は姉妹にたどりつく。

母親が違えば、父親がおなじでも結婚できる。

まるでササン朝ペルシアのような近親婚による血縁関係の強化である。

「同姓娶らず」とする朝鮮や中国など東アジアのなかでは、きわめて特異な社会風俗である。  
 いずれにしても、遠賀川下流域の宗像郡・鞍手郡などにおいて、宗像三女神・ニギハヤヒ・大國  
 主命の三者による血盟関係が構築されていることに注目すべきであろう。

### 影の薄いニニギノミコト

それにひきかえ、ニニギノミコトの影が薄い。

江戸時代の多田義俊によって引用されたとされる『豊前国風土記』逸文が、京都郡をニニギノミ  
 コトの日向への出発地としているが、そのことの真偽はともかくとして、嘉麻市の馬見山あたりにわ  
 ずかな伝承がみられるのみである。

#### ・足白(嘉麻市)

ニニギノミコトが足白の馬に乗って日向高千穂から天降ったという。

#### ・馬見山(嘉麻市・朝倉市)

ニニギノミコトが日向高千穂から足白の馬で天降ったとき、供奉した天の物部 25 部のうち、  
 馬見物部が住んだという。(『嘉穂郡誌』)

『魏志倭人伝』には「牛馬なし」と書かれているとおり、ニニギノミコトの時代においては、馬はいな  
 かったし、もちろん乗馬の習慣もなかったはずである。

ニニギノミコトが日向高千穂から足白の馬に乗ってこの地に天降ったという上記の伝承は、何ら  
 かの誤伝とみるしかない。

とすると、ニニギノミコトの伝承はほとんど皆無ということになる。

ニギハヤヒにくらべると、圧倒的に影が薄い。

しかしながら、最終的には南部九州を拠点としたニニギノミコトの系譜が天下を統一している。

日向高千穂へ天孫降臨したニニギノミコトにつづく【山幸彦——ウガヤフキアエズ——神武天皇】  
 という日向の系譜こそ、『古事記』『日本書紀』などすべての古代文献が共通して伝える本流の流れ  
 である。

にもかかわらず、この当時の北部九州におけるニニギノミコトの存在感の薄さは、後期邪馬台国  
 の時代のある時期までは、日向の勢力がきわめて弱小な勢力であったことを示すものともいえよう。

それはともかくとして、天照大神の岩戸隠れ以降——あるいは卑弥呼の死後、高天原勢力ないし  
 邪馬台国は、大勢としてその拠点を筑紫平野から豊前・遠賀川流域方面に移しているようにみえる。

それをまとめたのが下表である。

名	移動の動き
天忍穂耳命	筑紫平野?→英彦山(添田町)→岩石山(添田町・赤村)→油須原(赤村)・香春
万幡豊秋津師比売命	筑紫平野?→香春
タカミムスビ	高良山(久留米市)?→朝倉→英彦山
宗像三女神	水沼(筑後川・有明海)?→宇佐(豊前)→英彦山→嘉麻→鞍手・宗像(響灘)
ニギハヤヒ	筑紫平野(久留米)?→鞍手(遠賀川・響灘)

### 福岡県内の中国鏡の分布

筑紫平野から豊前・遠賀川流域方面への移動について、考古学的な観点から追跡してみよう。

実は、日本における青銅鏡の分布について、奥野正男氏がまとめられたデータがある(『邪馬台国はここだ』梓書院・2010・374頁)

表1 弥生時代青銅鏡府県別出土数

	中国鏡		国産鏡		合計
	前漢	後漢	大形	小形	
福岡	103	126	5	38	272
佐賀	10	32		20	62
大分	2	21		4	27
熊本		6		11	17
長崎	3	4		21	28
鹿児島		1		3	4
	190 (82.6%)				410 (81.5%)
山口	1	1		5	7
島根				2	2
鳥取		1		2	3
広島		2		1	3
岡山	2	3		7	12
					27 (5.4%)
愛媛		5		4	9
香川		2		2	4
徳島		3			3
高知		2			2
					18 (3.6%)
兵庫		7		4	11
大阪		4		7	11
京都		4			4
奈良			1	3	4
和歌山		2		1	3
	17 (7.4%)				33 (6.5%)
岐阜		1			1
滋賀				1	1
石川		2		4	6
富山				2	2
福井		1			1
愛知				1	1
神奈川				1	1
東京				1	1
群馬				1	1
					15 (2.9%)
計	121	230	6	146	
	351		152		503

九州を中心に比率などを加えて示せば次のとおりとなる。

		中国鏡		国産鏡		計
		前漢鏡	後漢鏡	大型	小型	
九州	福岡	103	126	5	38	272
	佐賀	10	32		20	62
	大分	2	21		4	27
	熊本		6		11	17
	長崎	3	4		21	28
	鹿児島		1		3	4
	計	118(97.5)	190(82.6)	5	97(66.4)	410(81.5)
本州	3	40	1	49	93	
全国計	121	230	6	146	503	



弥生時代後期の後漢鏡分布図

奴国の時代の前漢鏡、邪馬台国の時代の後漢鏡のいずれについても、圧倒的に福岡県から出土している。

奴国の中心地は、基本的に福岡平野的那珂川・御笠川流域にはさまれた春日市の須玖岡本遺跡あたりか、那珂川市の安徳台遺跡あたりにあったとみられることについては、これまで縷々述べたとおりである。

そして、カメ棺のなかに、前漢鏡・銅剣・玉などを埋納するカメ棺文化圏についても繰り返し述べたとおりである。

しかしながら、問題は邪馬台国の所在地である。

九州説のなかでも意見が大きく分かれていることについては、周知のとおりである。

そのなかでも、安本美典氏の朝倉説はじめ、筑紫平野説が最も有力とみているが、これはあくまで卑弥呼の時代のことである。台与の時代には豊前・遠賀川流域方面へ移動したのではないか。

奥野正男氏の『邪馬台国はここだ』(梓書院・2010)のなかに、後漢鏡の出土遺跡一覧が掲載されている。

表 12 国産鏡、後漢鏡を出土する弥生末期墳墓と遺跡表

地 方	遺 跡 名	墓 形	鏡 式						副 葬 品 その他注記	周 辺 墳 墓	文 献	
			方 格 規 矩 四 神 鏡	長 宜 子 孫 内 行 花 文 鏡	四 乳 四 螭 鏡	仿 製 内 行 花 文 鏡	そ の 他 内 行 花 文 鏡	そ の 他 後 漢 鏡				小 形 仿 製 鏡
福	糸島郡・平原	方形周溝墓	35	1	1	5			割竹形木棺、 素環頭大刀、玉	石棺、土壙、 双円周溝墓	「平原弥生古墳調査概報」	
	行橋市・前田山6号	箱式石棺墓					1		”	弥生墳墓群	「前田山遺跡」1977	
	” 石並26号	”		1					小盛土	”	”	
	厚川町・石ヶ坪	”						1	変形獣形鏡	”	「古代学研究」20	
	香春町・宮原3号	”					1		”	”	「香春町誌」	
	” ” 2号	”					1		”	”	”	
	” ” 1号	”					1	1	大刀	”	”	
	北九州市・馬場山	”						1	夔鳳鏡	”	「馬場山遺跡」1975	
	” 岩屋	”						4	鏡式不明	”	「北九州市の埋蔵文化財」	
	” 長行	”						1	四禽文鏡	”	”	
	朝倉郡・後山1号	”		1					”	”	「埋もれていた朝倉文化」	
	中間市・八つ広	”			1				”	”	「中間市史」	
	鞍手町・汐井掛28号	土壙・木棺墓						1	夔鳳鏡	”	「くらてのむかし」1976	
	” ” 4号	箱式石棺墓	1						”	”	”	
	” ” 6号	”		1					”	”	”	
岡	柏屋町・酒殿高崎	”						1	1	獣首鏡	”	
	” 平塚	”		1					玉	”	「九州考古学」11.12	
	福岡市・日佐原E-15	土 壙 墓		1					玉	”	”	
	” 野方中原3号	箱式石棺墓					1		玉	弥生墳墓群	「野方中原遺跡」1974	
	” ” 1号	”						1	玉、獣帯鏡	”	”	
	久留米市・祇園山	方形台状墳裾						1	漆棺内、玉 面文帯神獣鏡	”	「考古学ジャーナル」73,1972	
	八女市・亀の甲95号	箱式石棺墓	1						”	”	「九州歴史資料館論集」2	
	京都郡・勝山上所田	石蓋土壙墓		1				1	鳥文鏡	”	「九州考古学」7,8	
	宍	勝本町・カラカミ	”		1					2	包含層	”
		芦辺町・大原	不 明	1	1						”	”
対	上対馬町・塔の首4号	箱式石棺墓	1						斧	弥生墳墓群	「対馬」	
	上県町・大將軍山	”						1	夔鳳鏡	”	「対馬の自然と文化」	
大	日田市・清岸寺	”	1							”	”	
	” 名草台	”						1	獣帯鏡	”	”	
	宇佐市・赤塚	方形周溝墓						1	箱式石棺 弥生土器供献	”	”	
	竹田市・養生・小園	”						1	”	”	”	
	大野町・二本木	”	1						”	”	”	
” 松ノ木	”					1		”	”	”		
佐	神埼郡・二塚山26号	土 壙 墓		1					管玉221	弥生墳墓群	「二塚山遺跡群」1977	
	” ” 29号	”						1	獣帯鏡	”	”	
	” 五本谷2号	”	1						”	”	”	
賀	北方町・椀島山	箱式石棺墓						1	方格規矩鳥文鏡	”	”	
	大和町・池の上	”	1						”	”	”	
岡山	総社市・宮山	前方後円墳						1	四獣鏡	弥生墳墓群	”	
兵	加古川市・西条52号	竪穴式石室円墳		1					”	弥生土器供献	「西条古墳群調査略報」1964	
	揖保川町・養久山	前方後円墳						1	四獣鏡	弥生墳墓群	「兵庫県史」1	
奈良	菟田野町見田・大沢	”						1	”	”	”	

2010年発刊本なので最新の情報とはいえないが、大局的な傾向をみる資料としては活用できよう。

上記データのうち、福岡県分について地域別に区分すると、次のとおりとなる。

#### 福岡県出土の後漢鏡等の分布

地域		鏡数	割合	備考
糸島(伊都国)		42	61.0	平原遺跡(かなり日本製が混じっているようである)
豊前	京都郡	5	7.2	・前田山 6号 1(行橋市)・石並 26号 1(行橋市) ・石ヶ坪 1(みやこ町犀川)・勝山上所田 2(みやこ町勝山)
	田川郡	4	5.8	・宮原 3号 1・宮原 2号 1・宮原 3号 2(いずれも香春町)
	企救郡	6	8.7	・馬場山 1・岩屋 4・長行 1(いずれも北九州市)
	小計	15	21.7	最も多い。
朝倉郡		1	1.5	・後山 1号 1(朝倉市)→邪馬台国朝倉説を支持しない。
鞍手・遠賀		3	4.3	・八つ広 1(中間市)・汐井掛 28号 1・汐井掛 4号 1 ・汐井掛 6号 1(いずれも鞍手町) → 一定の勢力
糟屋郡 (不弥国)		3	4.3	・酒殿宮崎 2・平塚 1(いずれも粕屋町) → 一定の勢力
福岡(奴国)		3	4.3	・日佐原 E-15(福岡市)1・野方中原 3号(福岡市)1 ・野方中原 1号(福岡市)1 → 一定の勢力
筑後		2	2.9	・祇園山 1(久留米市)・亀の甲 1(八女市)
計		69	100.0	

奥野氏の集計によると、後漢鏡 126 枚のうち弥生末期の鏡は 69 枚となる。

このことから、意外な結果が見えてくる。

第一に、少なくとも後漢鏡の弥生末期における福岡県内の出土状況は、邪馬台国筑紫平野説——とりわけ邪馬台国朝倉説を支持していないのである。

第二に、伊都国の平原遺跡(糸島市)の出土が群を抜いていることである。

ただし、伊都国は邪馬台国ではない。しかも、大型鏡はすべて国産とされ、他の鏡についても多くが国産鏡のようである。伊都国については、何か別の理由がありそうである。

そうすると、豊前地域の 21.7%という数値は注目に値する。伊都国を除外した出土数の3分の2を占めている。

朝倉からほとんど出土しないのに、何ゆえ豊前から多く出土するのか。

魏(220～265)			西晋(265～ 316)
後漢鏡・魏鏡			魏・晋鏡
239年	243年	248年	266年
卑弥呼が使者派遣	卑弥呼が使者派遣	台与が使者派遣	台与が使者派遣
都は筑紫平野		都は豊前	

卑弥呼が239年に魏から授与された銅鏡百枚は後漢鏡・魏鏡であつたろう。

243年の遣使の際の目録はないが、同程度の鏡を魏からもらったにちがいない。

しかしながら、247年に卑弥呼が没すると、これまで縷々述べたように、邪馬台国はその拠点  
豊前地方に移した——とみている。

したがって、卑弥呼が部下に対して生前に配った後漢鏡・魏鏡が豊前地方の墓から多く出土  
するのは当然のことである。

これが筑紫平野——甘木朝倉から出土しない理由である。

よって安本美典氏の邪馬台国朝倉説が破綻したわけではない。

そして、安本美典氏によれば、蝙蝠座内行花文鏡と位至三公鏡は魏と晋の時代に盛行したとされる。

魏の時代の鏡について、徐萃芳氏は次のようにも述べている。

「三国の魏が成立しますと、尚方が再建され、このうち『右尚方』が銅鏡製作の任を負いました。かくて銅鏡の鑄造は回復されたのですが、それほど大きな進展があつたわけではありません。この時代に鑄造された銅鏡、例えば方格規矩鏡・内行花文鏡・獸首鏡・鳳鏡・盤竜鏡・鳥文鏡・双頭竜文鏡などは、すべて後漢以来の「旧式鏡」に属します。

もともと、後漢のものとは比べてみますと、方格規矩鏡の文様は、簡略化の傾向をたどっておりますし、内行花文鏡の鈕座が、多く蝙蝠(こうもり)の形になり、獸首鏡の獸首文様にも変化が生じました。河南省の洛陽で、後漢末期と三国魏の時代の墓が数多く発掘されましたが、そこから出土した銅鏡は、内行花文鏡・獸首鏡・方格規矩鏡・盤竜鏡などでして、最も数多いのが内行花文鏡と変形獸首鏡でした。」

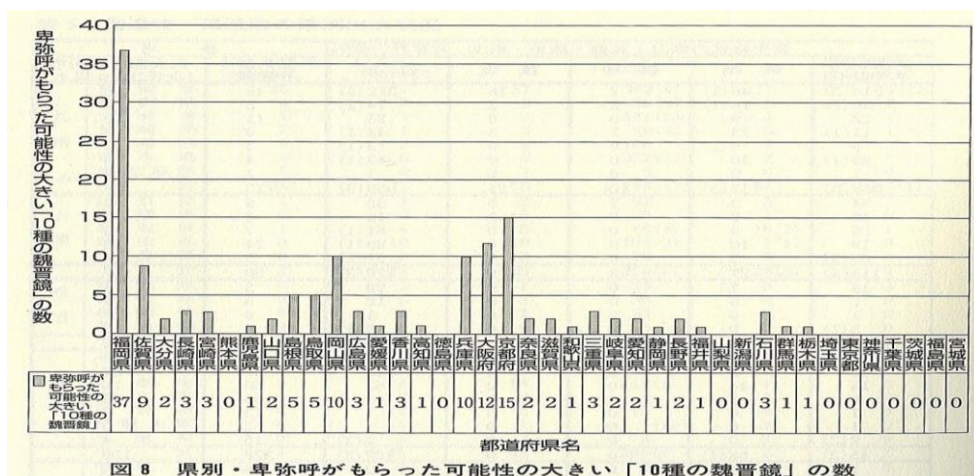
「方格規矩鏡・内行花文鏡・鳳鏡・獸首鏡、これらはすべて後漢の鏡ですが、魏晋の時代に入ってもそのまま中国の北方で流行していました。ただ、様式的にはいくつかの変化が現れます。たとえば方格規矩鏡の文様はより簡略化され、内行花文鏡の鈕座は多く蝙蝠の形をとるようになり、また獸首鏡の文様も全く獸首らしくなくなりました。」

「考古学的には、魏および西晋の時代、中国の北方で流行した鏡は明らかに、方格規矩鏡・内行花文鏡・獸首鏡・鳳鏡・盤竜鏡・双頭竜鳳文鏡・位至三公鏡・鳥文鏡などです。従って、邪馬台国が魏と西晋から獲得した銅鏡は、いまあげた一連の銅鏡の範囲を越えるものではなかつたと言えます。とりわけ方格規矩鏡・内行花文鏡・鳳鏡・獸首鏡・位至三公鏡、以上の五種類のものである可能性が強いのです。」(『三角縁神獸鏡の謎』角川書店・1985)

ここで留意すべきは、「蝙蝠鈕座内行花文鏡」が、魏の時代にはじめて出現したとされていることである。



安本美典氏のグラフでも次のとおりとされている。



- (10) 円圈鳥文鏡
- (9) 飛禽鏡
- (8) 三角縁盤電鏡を除く盤電鏡
- (7) 獸首鏡
- (6) 夔鳳鏡
- (5) 漢鏡 6期の方格規矩鏡
- (4) 方格規矩鳥文鏡
- (3) 双頭電鳳文鏡
- (2) 位至三公鏡
- (1) 蝙蝠鈕座内行花文鏡

これについても、下表のとおり、朝倉地域から出土せず、豊前地域から3面出土しているのは、これまた台与が豊前地域に根拠を置いていたことを強く示唆している。

福岡県出土の蝙蝠座内行花文鏡

地域	鏡枚数	備考
糸島(伊都国)	1	・三雲寺口遺跡 1(糸島市前原)
豊前	京都郡	1 ・前田山 1(行橋市)・徳永川ノ上遺跡 1(みやこ町) ※奥野氏は前田山の1面を後漢鏡にカウントしている。
	田川郡	
	企救郡	
	小計	1
朝倉郡		
嘉穂郡	1	・谷鎮遺跡 1(飯塚市)
鞍手・遠賀・宗像	1	・久原遺跡 1(宗像市)
糟屋郡(不弥国)	2	・上大隈平塚古墳 1(粕屋町)・神領 2号墳 1(宇美町)
福岡(奴国)	3	・老司古墳 1(福岡市)・野方中澤遺跡 1(福岡市) ・御笠地区遺跡 1(筑紫野市)
筑後	1	・潜塚古墳 1(大牟田市)
計	10	

### 福岡県出土の位至三公鏡

地域		鏡枚数	備考
糸島(伊都国)		1	・正恵古墳 1(糸島市前原)
豊前	京都郡	2	・犀川町山鹿 2号(みやこ町犀川)1 ・徳永川ノ上遺跡 1(みやこ町) ※蝙蝠座と重複
	田川郡		
	企救郡	1	・岩谷遺跡 1(北九州市)
	小計	3	
朝倉郡			
嘉穂郡			
鞍手・遠賀・宗像			
糟屋郡(不弥国)		1	・粕屋町 1
福岡(奴国)		3	・歙崎遺跡 1(福岡市)・鶯田山遺跡 1(筑紫野市)・伝 1(福岡市)
筑後			
計		8	

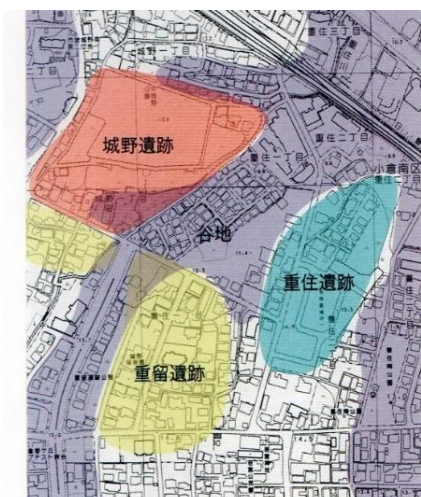
なお、豊前京都郡方面の主要な遺跡は先に紹介したので、この際、豊前北部(北九州市方面)や豊前南部(豊前市方面)および豊前西部(田川郡・遠賀川流域)の遺跡について、主なものについて個別に紹介しておこう。

#### 豊前北部(北九州市方面)の遺跡群

福智山を源流とする紫川は、北九州市小倉南区・小倉北区——すなわち、企救郡を経て響灘に注ぐ全長約 22 キロの川である。その紫川河口から約 4 キロ上流付近の東側丘陵に、城野遺跡・重住遺跡・重留遺跡という邪馬台国時代と重なる集落がある。



城野遺跡	JR城野駅の南口近くの遺跡 九州最大規模の方形周溝墓、水銀朱が塗られた幼児石棺2基(下写真)、 碧玉(出雲花仙山産)・ヒスイ(糸魚川産)・水晶・メノウなどの玉作り工房を 含む集落などが出土
重住遺跡	ガラス玉 200 個が出土
重留遺跡	祭祀用の広形銅矛が住居跡から出土(国重要文化財指定)



なお、1996年(平成8)に小倉城下屋敷跡(北九州市小倉北区)から後漢鏡が出土している。  
直径15.6センチの「長宜子孫」銘内行花文鏡である。鏡面には、水銀朱付着繊維、平絹、高級絹織物の可能性もある繊維の3種類の布の繊維が付着しており、これらの布で鏡を二重に包んでいたことが判明している。



城野遺跡(北九州市小倉南区域野)は、2009年(平成21)から2010年(平成22)にかけて調査され、九州2例目の玉作り集落と確認された。

1 例目は、2003 年（平成 15）に糸島市——伊都国の潤地頭給（うるうじとうきゅう）遺跡である。

この遺跡は玉作りに特化した集落で、工房跡からは、玉の未製品や加工用の工具類などが出土し、碧玉・水晶・メノウなどで管玉などを造っていたことが確認された。

城野遺跡が所在する小倉南区は、かつて企救郡に属していた。邪馬台国周辺諸国 21 か国の最後の方に列挙されている支惟（きく）国に該当するのではないかとみている。発音的によく似ているからである。

したがって、城野遺跡・重住遺跡・重留遺跡一帯は、支惟国＝企救国の拠点集落であった可能性が高い。

そこでは、糸島（伊都国）とともに、出雲や越など日本海地域との玉づくりなどを通じた交流が行われていたわけである。

なお、日本海を舞台にした海の交流——とりわけ出雲との交流については、次号から詳しく述べることとしている。

### 豊前南部(豊前市方面)の遺跡群



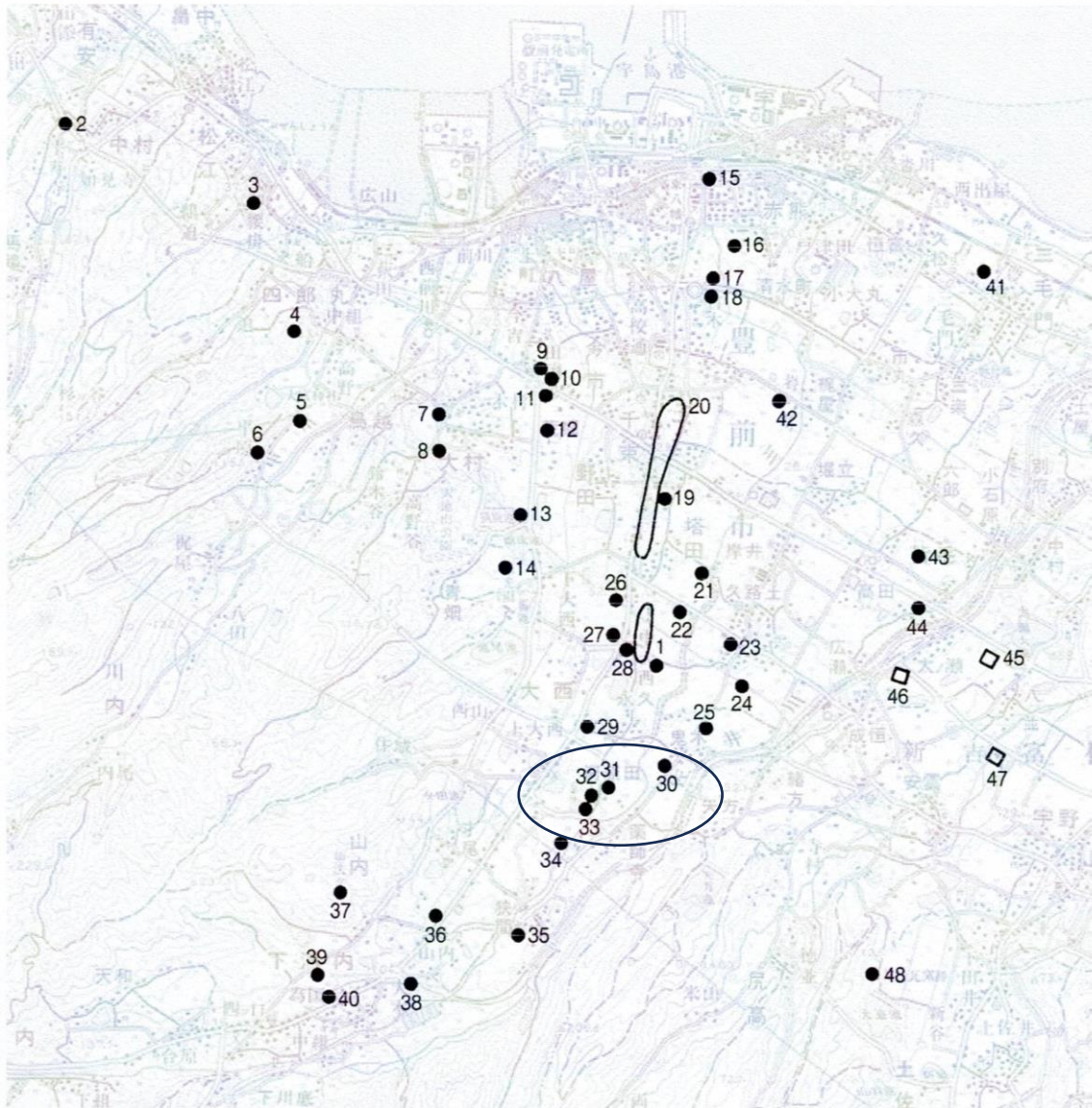
### 河原田遺跡群

行橋市から南東 20 キロの距離の豊前市鬼木・大字河原田に所在する遺跡である。

佐井川西岸の丘陵地にあり、丘陵を切り裂くように、岩岳川が流れている。

北側から、鬼木四反田遺跡、河原田塔田遺跡、河原田善丸遺跡、河原田四ノ坪遺跡と連なっている（『邪馬台国時代の豊』行橋市教育委員会）。





- |            |            |             |             |             |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 塔田琵琶田遺跡  | 2 中村石丸遺跡   | 3 黒部古墳群     | 4 四郎丸窯跡     | 5 川内楠木遺跡    |
| 6 平原横穴墓群   | 7 大村天神林遺跡  | 8 大村石畑遺跡    | 9 荒堀大保遺跡    | 10 荒堀雨久保遺跡  |
| 11 荒堀車地遺跡  | 12 荒堀中ノ原遺跡 | 13 大村シトキ田遺跡 | 14 青畑向原遺跡   | 15 昭和町遺跡    |
| 16 赤熊花ノ木遺跡 | 17 吉木常末遺跡  | 18 吉木遺跡     | 19 旭城跡      | 20 千塚原古墳群   |
| 21 久路土芝掛遺跡 | 22 久路土高松遺跡 | 23 久路土六田遺跡  | 24 久路土鐘鐺田遺跡 | 25 鬼木鈴立遺跡   |
| 26 東風ノ風遺跡  | 27 大西遺跡    | 28 西ノ原遺跡    | 29 永久遺跡     | 30 鬼木四反田遺跡  |
| 31 河原田塔田遺跡 | 32 河原田善丸遺跡 | 33 河原田四ノ坪遺跡 | 34 薬師寺塚原遺跡  | 35 挟間宮ノ下遺跡  |
| 36 山内柳ヶ坪遺跡 | 37 如法寺     | 38 下河内桃ノ木遺跡 | 39 下河内歳手遺跡  | 40 下河内大水口遺跡 |
| 41 開立寺遺跡   | 42 吉木芦町遺跡  | 43 小石原泉遺跡   | 44 皆毛高屋代遺跡  | 45 大ノ瀬官衙遺跡  |
| 46 フルトノ遺跡  | 47 下島ヲカ遺跡  | 48 友枝瓦窯跡    |             |             |

河原田善丸遺跡で稲作がはじまり、周辺に拡大していった。多種多様の青銅器・鉄器が出土し、邪馬台国時代になると、小石原泉方面に拠点に移り、160軒ほどの集落を形成していたという。

豊前南部地域における後漢鏡などの出土状況は下表のとおりである。

ただし、平成の大合併前の資料であるため、勝山町・犀川町・豊津町は京都郡みやこ町、大平村は築上郡上毛町に読み替えられたい。また「鏡式」にやや不正確な記述が散見されるので参考資料に留められたい。

### 豊前南部地域における後漢鏡などの出土状況

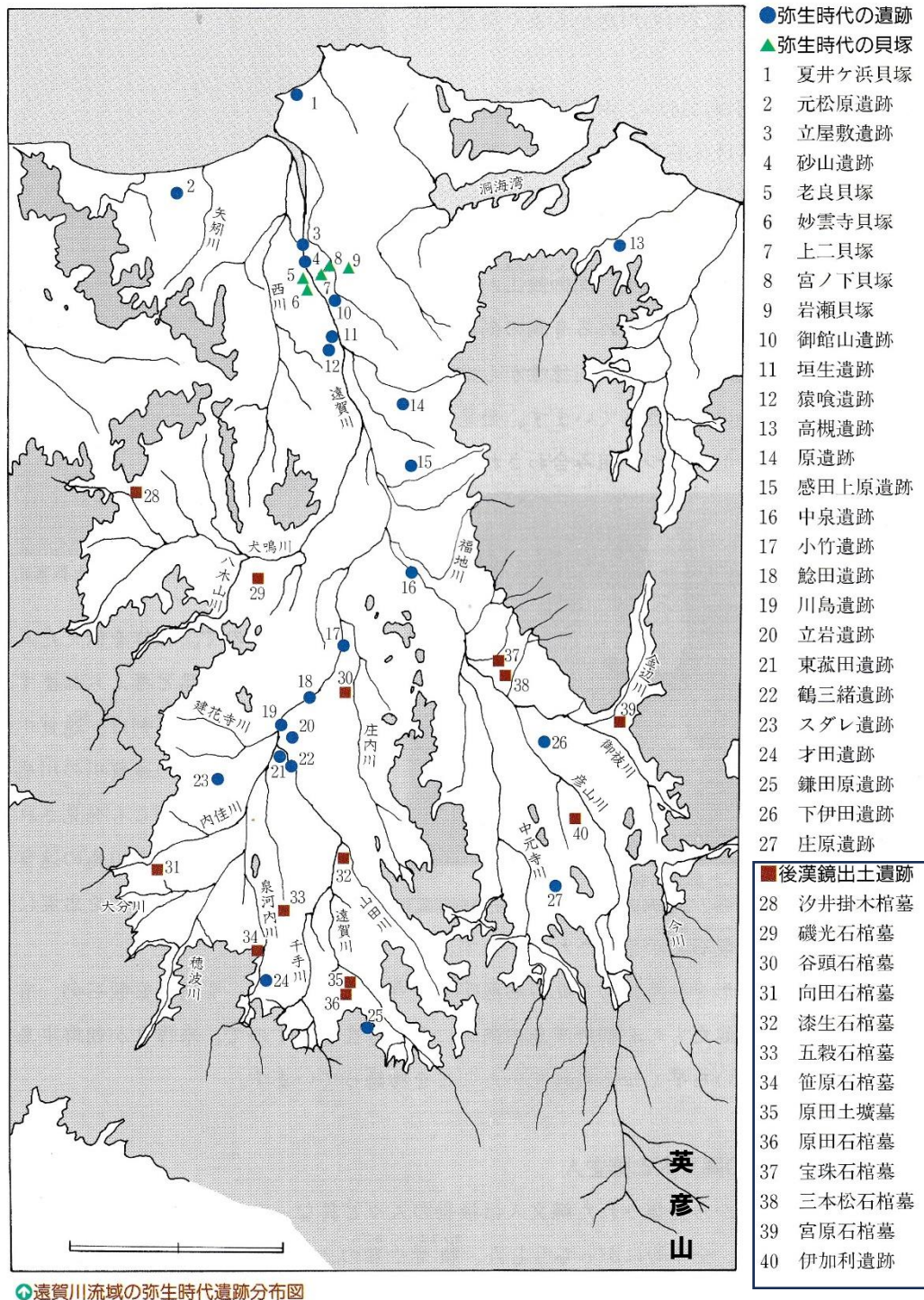
	遺跡名	所在地	出土遺構	鏡式
1	石並遺跡	行橋市稲童	箱式石棺	舶載内行花文鏡片
2	津留遺跡	行橋市津留	溝	舶載方格規矩鏡片
3	上田遺跡	勝山町上田	箱式石棺	前漢鏡？
4	前田山遺跡	行橋市前田	石蓋土壙墓	仿製内行花文鏡
5	前田山遺跡Ⅰ-8号墓	行橋市前田	箱式石棺	舶載内行花文鏡
6	小長川遺跡	勝山町長川	箱式石棺	舶載神獸鏡
7	上所田遺跡	勝山町松田	石蓋土壙墓	舶載内行花文鏡片
8	上所田遺跡	勝山町松田	石蓋土壙墓	舶載鳥文鏡片
9	山鹿遺跡	犀川町山鹿	石蓋土壙墓	製内行花文鏡
10	山鹿遺跡2号箱式石棺墓	犀川町山鹿	箱式石棺	連弧文変形双獸鏡片
11	タカデ遺跡	犀川町木井馬場	箱式石棺	仿製内行花文鏡
12	センソク遺跡	犀川町続命院	箱式石棺	仿製内行花文鏡
13	本庄遺跡	犀川町本庄	箱式石棺	？
14	平遺跡	豊津町上坂	箱式石棺	夔鳳鏡片
15	川ノ上遺跡Ⅰ-6号墓	豊津町徳永	土壙墓	舶載方格規矩鏡片
16	川ノ上遺跡Ⅰ-8号墓	豊津町徳永	土壙墓	舶載三角縁画像鏡片
17	川ノ上遺跡Ⅳ-19号墓	豊津町徳永	石蓋土壙墓	舶載三角縁盤龍鏡
18	川ノ上遺跡2-1号棺	豊津町徳永	箱式石棺	舶載方格規矩鏡片
19	川ノ上遺跡4-4号棺	豊津町徳永	箱式石棺	舶載内行花文鏡
20	川原田塔田遺跡	豊前市川原田	土壙墓	韓国製仿製鏡片
21	穴ヶ葉山遺跡	大平村下唐原	石蓋土壙墓	舶載内行花文鏡片
22	田代遺跡（下唐原遺跡群）	大平村下唐原	環濠	舶載内行花文鏡片

### 豊前西部(田川郡・遠賀川流域)の遺跡群

『香春町の文化財』(香春町・2022)などによると、田川郡香春町では、五徳畑ヶ田遺跡、ミノ・大熊遺跡、宮原遺跡、岩原遺跡、上高野遺跡、一本松遺跡などから弥生時代の集落跡や墓地から、多量の甕、高坏等の土器や磨製石斧、石戈、石鏃などの石器が出土している。

とりわけ、宮原遺跡の石棺墓群から「長生宜子」銘・大型内行花文鏡をはじめ、4枚の青銅鏡を出土している。

また、浦松古坊遺跡では弥生後期から終末期にかけての石棺墓と土壙墓合わせて20基が確認されている。



なお、上図の「■後漢鏡出土遺跡」に掲載された各遺跡について、以下その個別の概要を紹介しよう。(遺跡ナンバーNo.は上図による。なお、No.29 の磯光石棺墓については情報を確認できなかったのを省いた)

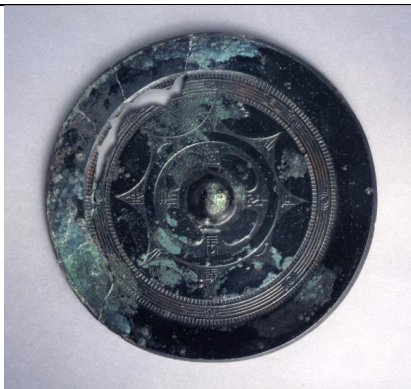




宮原遺跡(No.39 田川郡香春町高野)

明治 36～37 年(1903～1904)ごろ、2基の箱式石棺墓から後漢鏡2面(1号鏡・2号鏡)と大型鏡1面の破片と国産の鏡1面(3号鏡)の計4面が出土した。

大型鏡 1 面の破片は発見者により周辺に捨てられたとされ、現在は1号鏡・2号鏡・3号鏡の3面が残っている。卑弥呼の時代と重なる可能性の高い鏡である。

しかも、万幡豊秋津師比売命(=台与) が拠点を置いたとみられる香春町からの出土である。

捨てられた大型鏡1面(破片)が惜しまれる。

種別	宮原遺跡出土の青銅鏡		備考
後漢鏡	1号鏡	 <p>「長生宜子」「壽如金石」銘内行花文鏡 (19.5 cm) (四弁花文・座雲雷紋帯・内行花文鏡)</p>	<p><u>遠賀川流域内で最も大きい。</u> 弥生時代後期～終末期</p> 
	2号鏡	 <p>内行花文鏡(12.3 cm) (四弁花文鈕座・内行花文鏡)</p>	<p>弥生時代後期～終末期</p> 
国産鏡	3号鏡	 <p>小形仿製鏡 (9.5cm) 日光鏡系内行花文鏡</p>	<p>弥生時代後期～終末期</p>





### 伊加利遺跡(No.40 田川市伊加利)

遺構の詳細は不明であるが、箱式石棺からは径 18.65 センチの内行花文鏡の完形品が出土したという。

### 三本松遺跡(No.38)と宝珠遺跡(No.37 田川郡福智町赤池)

三本松遺跡と宝珠遺跡が所在する田川郡福智町の伊方丘陵は、弥生時代から古墳時代までの遺跡が多く存在し、拠点的な集落があったと考えられている。

1955 年(昭和 30)に三本松遺跡、1987 年(昭和 62)に宝珠遺跡から各 1 面の後漢鏡——内行花文鏡が出土している。

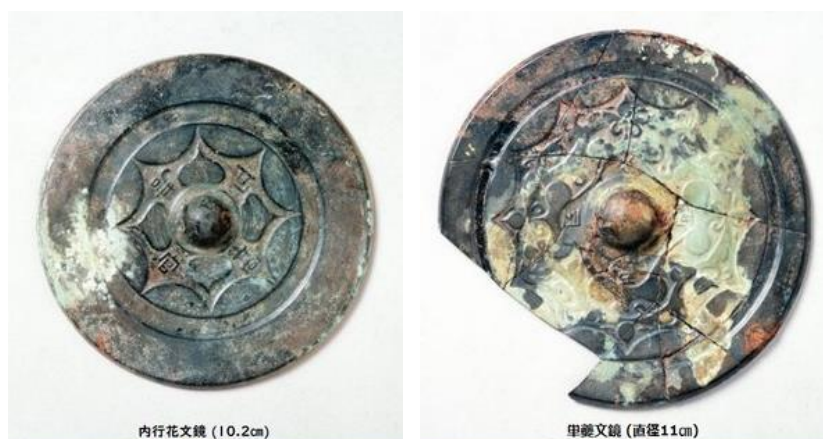
 <p>径 9.7 cm</p>	 <p>径 15.6 cm</p>
三本松遺跡	宝珠遺跡

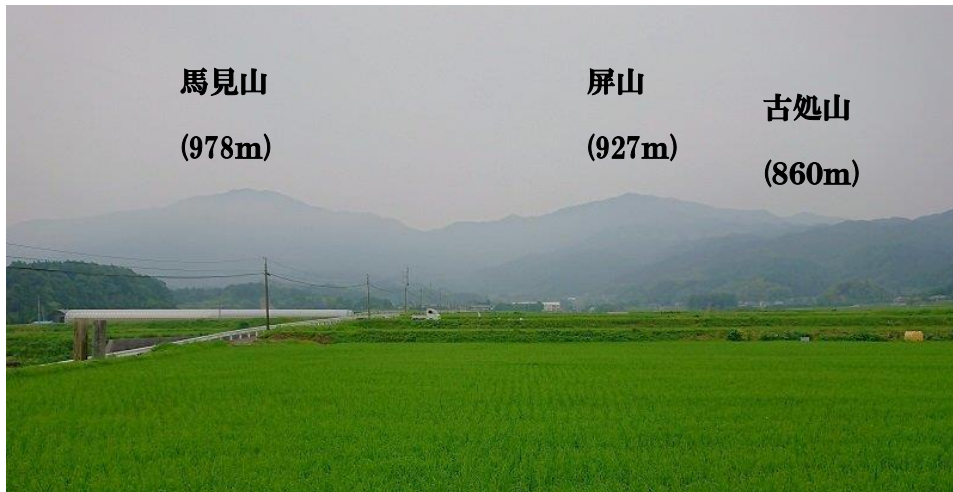
### 原田遺跡(原田土壙墓No.35・原田石棺墓No.36 嘉麻市馬見)

標高 75 メートルの広大な馬見台地の先端部——遠賀川支流の屏川と浦谷川にはさまれた所に原田遺跡(嘉麻市馬見)がある。

弥生時代中期～後期～古墳時代初期の墳墓群からは、木棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓、カメ棺墓など 77 基と青銅器や鉄製武器、石製武器、装飾品など多くの副葬品が出土した。

嘉穂盆地の墳墓から青銅器が検出される例は珍しく、とりわけ小銅鐸が出土し、しかも、「君宜高官」銘内行花文鏡(径 10.2 cm)と「長生宜子」銘夔鳳鏡(径 11.0 cm)の 2 面が出土している。





#### 笹原遺跡(笹原石棺墓No.34 嘉麻市笹原)

嘉穂郡(嘉麻郡・穂波郡)が所在する嘉麻盆地は、北側を除く三方を山塊に囲まれ、南部には標高 900m級の古処山、屏山、馬見山などの山々が連なり、筑紫平野と隔てられている。

縄文時代の遺跡も豊富で、弥生時代前期には稲作も開始され、集落も拡大し、大規模な墳墓も形成された。西方の奴国の影響は割と希薄で、カメ棺も小・中型の小児用が多く、成人用としては木棺墓や土壙墓が多い。ただし、飯塚市の立岩遺跡は奴国の影響を大きく受けており、王墓とみられるカメ棺が出土し、前漢鏡が埋納されていたことは、「奴国の時代」のなかで述べたとおりである。

嘉麻地方の弥生時代後期の集落遺跡では、ケショウデ遺跡、貞月遺跡、アミダ南遺跡、イカマクチ遺跡などがあるが、墳墓では、五穀神社遺跡と笹原遺跡の石棺墓から後漢鏡各 1 面が出土している。

#### 五穀神社遺跡 (五穀石棺墓No.33 嘉麻市飯田)

五穀神社の建替え作業中に石棺から出土したと伝えられてる。



#### 唐草文帯・方格規矩四神鏡)

「■言之紀鏡光■龍居左■虎居右」銘

径 14.05cm。

青龍・朱雀・白虎・玄武の四神図などが描かれている。

### 漆生石棺墓(No.32 嘉麻市漆生)

嘉麻市漆生の箱式石棺からも、夔鳳鏡が出土している。



なお、福岡県における夔鳳鏡の出土遺跡は次のとおり。

長須隈古墳	糸島郡二丈町鹿家長須隈	径 17.0 cm	伊都国
岡本遺跡 D 地点王墓	春日市岡本町	径 13.6 cm	奴国
沖ノ島 17 号	宗像市大島沖ノ島	径 22.1 cm	宗像
沖ノ島 18 号	宗像市大島沖ノ島	径 22.0 cm	宗像
漆生箱式石棺	嘉麻市漆生	φ	嘉麻
原田遺跡	嘉麻市馬見原田	径 11.0 cm	嘉麻
馬場山遺跡	北九州市八幡西区馬場山	径 14.0 cm	豊前
平遺跡	京都府みやこ町上坂平	径 16.0 cm	豊前
能満寺 3	築上郡上毛町下唐原	φ	豊前


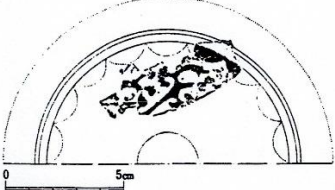
向田石棺墓(No.31 飯塚市・旧筑穂町)・「長宜子孫」銘内行花文鏡

谷頭石棺墓(No.30 飯塚市佐興)・「長宜子孫」銘蝙蝠座内行花文鏡(径 12.4 cm)

汐井掛遺跡(No.28 宮若市汐井掛)

木棺墓	「長宜子孫」銘内行花文鏡 (径 18 cm・破片)	
土壙墓	「長宜子孫」銘内行花文鏡 (径 16.9 cm・破片)	素環頭刀子・鉄剣・馬具・玉類などが随伴出土
箱式石棺	「長宜子孫」銘内行花文鏡 (径 16.0 cm・破片)	

以上のほか、遺跡一覧にはないが、遠賀川右岸の北九州市八幡西区の馬場山遺跡からも、方格規矩鏡と夔鳳鏡（双頭龍紋鏡）が出土している。

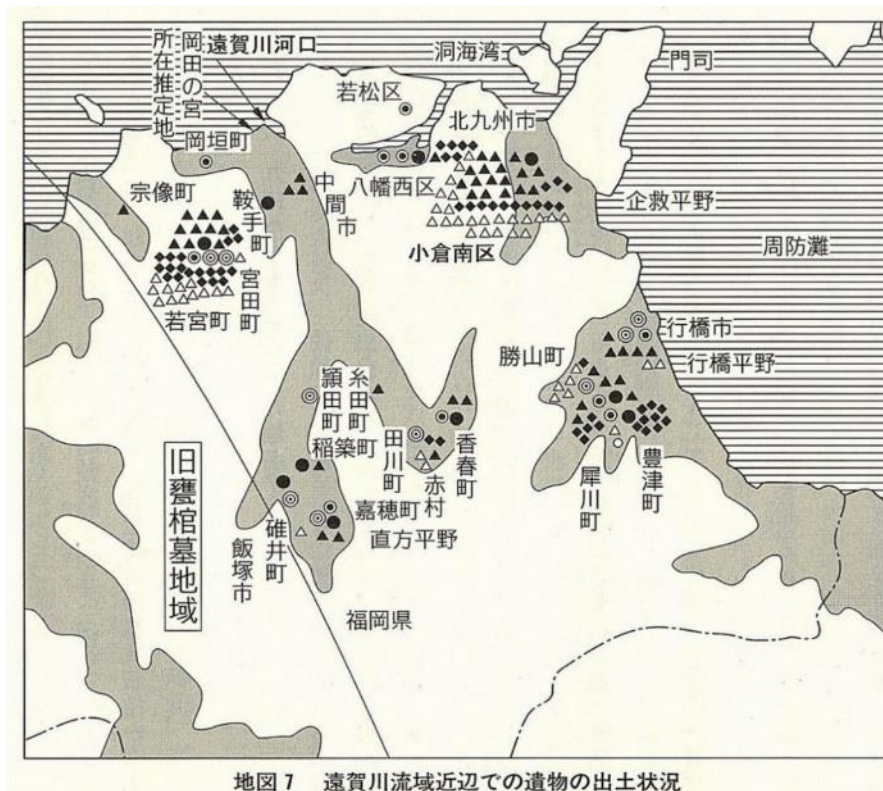
石槨墓	方格規矩鏡(径 9.8 cm・破片)	
土槨墓	夔鳳鏡（双頭龍紋鏡） (径 14.0 cm・破片)	 第6図 馬場山遺跡4号土槨墓出土鏡
祭祀遺構	小形仿製鏡	



以上、主として後漢鏡と魏晋鏡に着目して、豊前および遠賀川流域の主な遺跡について紹介した。

何を言いたかったかといえば、要するに、全国でも福岡県において最も多くみられる後漢鏡・魏晋鏡が、伊都国(糸島市)を除き、甘木朝倉ではなく、意外にも、豊前・遠賀川流域から最も多く出土するという事実である。

ちなみに、下図は安本美典氏が作成された邪馬台国時代の遺物の分布図である。



- ◎印は、小形仿製鏡第Ⅱ型。
- ▲印は、箱式石棺から出た鉄の剣・刀・刀子等。
- 印は、箱式石棺から出た鏡。
- ◎印は、「長宜子孫」銘内行花文鏡。
- ◆印は、箱式石棺から出た鍔。
- △印は、箱式石棺から出たその他の鉄器。
- 印は、玉の出土地点。

青銅鏡に限らず、邪馬台国時代の考古学的遺物が、この地域に密に存在していたことを指し示している。

このことは、天照大神の次世代の神々——宗像三女神、天忍穗耳命、万幡豊秋津師比売命、タカミスビ、ニギハヤヒなどが、豊前・遠賀川方面に拠点を置いた伝承とも符合している。

とりわけ、豊比咩命＝万幡豊秋津師比売命が拠点を置いたとみられる香春の宮原遺跡から、後漢鏡2面(1号鏡・2号鏡)、大型鏡1面の破片、国産の鏡1面(3号鏡)の計4面が出土したこの意味はきわめて大きい。現在は1号鏡・2号鏡・3号鏡の3面は現存しているが、失われた大型鏡1面が平原遺跡の大型鏡——直径 46.5 cmの八咫鏡であった可能性も考えられよう。

万幡豊秋津師比売命のずっと後の末裔とみられる神夏磯媛も八咫鏡を保有していた。しかも、彼女はすでに述べたように、香春神社の直近の若八幡神社に祭られている。

しかしながら、万幡豊秋津師比売命はじめ、天忍穗耳命やタカミスビの最期についての情報は皆無である。台与についても、266年の西晋への使節団派遣以降の情報はまったくない。

ところが、見逃せない情報が遠賀川下流に残されている。ほかならぬニギハヤヒである。

そのことを紹介して、本号の結びにしよう。

## 『先代旧事本紀』

『先代旧事本紀』という書物がある。序文に推古 28 年(620)に推古天皇の命によって聖徳太子と蘇我馬子が著し、推古 30 年(622)完成したとあるが、聖徳太子没後の記事がまじっていることなどもあり、現代に至るまで偽書論争がつづいている。

しかも、戦後においては、天皇制そのものを問題視する立場から、『古事記』『日本書紀』の地位も著しく低下し、『先代旧事本紀』の真贋論争自体がほとんど話題にもならなくなっている。

しかしながら、本居宣長は『古事記伝』のなかで、

「旧事本紀と名づけたる十巻の書あり、此は後の人の偽り輯(あつ)めたる物にして、さらにかの聖徳太子命の撰び給し、真(まこと)の紀(ふみ)には非ず。…但し、三巻のうち饒速日命(ニギハヤヒ)の天より降り坐す時の事と、五巻の尾張連物部連の世次と、十巻の国造本紀と云ふ物と、是等は何の書にも見えず、新に造れる説とも見えざれば、他に古書ありて、取れる物なるべし」

と述べているように、第三巻のニギハヤヒの天降り、第五巻の尾張氏の系譜、第十巻の国造本紀については、古い時代の記録を基にした記事であり、捏造ではないとしている。

尾張氏の系図については、籠神社(京都府宮津市)の海部氏系図・住吉大社(大阪市住吉区住吉)の津守氏系図や『古事記』『日本書紀』の記事ともきわめてよく整合している。

国造本紀についても、『古事記』『日本書紀』の各地の国造の記事とよく整合している。

というより、『古事記』『日本書紀』にない多くの独自情報が記載されている。

しかも、各地に残された地域伝承や社伝などもよく整合している。

古代日本の情報を伝えてくれる貴重な文献というべきである。

もちろん、『古事記』『日本書紀』や『古語拾遺』などから採られたであろう記事も散見されるが、当時は盗作などという観念のない時代である。引用するのにいちいち出典を明示する習慣などなかった時代である。

一読もせずにゴミ箱に捨てるなど、断じて許されるべきではない。

戦後 70 数年——『古事記』『日本書紀』、そして『先代旧事本紀』など、日本の古代文献の長い受難の時代がつづいている。

## ニギハヤヒの拠点はや遠賀川下流

『先代旧事本紀』によると、ニギハヤヒは神武天皇に先立って九州から近畿に東遷した人物である。『日本書紀』の神武天皇紀のなかにも、そのことを前提にした記事が載せられている。

前述したように、ニギハヤヒは鞍手郡南部の笠置山(425メートル)に天降りし、宮若市宮田町大字磯光字儀長(旧鞍手郡宮田町)の「天照神社」に祭られている。

宗像三女神のうちの市杵島姫を娶り、さらに多岐津姫命と大国主命の間にできた天道日女を娶って天香語山命(高倉下)を儲けている。孫は天村雲命である。

そして、ニギハヤヒは近畿へ東遷した。

そのとき随行したメンバーも『先代旧事本紀』に掲載されている。

次のとおりである。

○ニギハヤヒに随行した 32 人

(1)天香語山命(あまのかごやま)	尾張連らの祖。	ニギハヤヒの子
(2)天細壳命(あまのうずめ)	猿女君らの祖	天の岩戸
(3)天太玉命(あまのふとたま)	忌部首らの祖	天の岩戸
(4)天児屋命(あまのこやね)	中臣連らの祖	天の岩戸
(5)天櫛玉命(あまのくしたま)	鴨県主らの祖	
(6)天道根命(あまのみちね)	川瀬造(かわせのみやつこ)らの祖	
(7)天神玉命(あまのかむたま)	三嶋県主らの祖	
(8)天楯野命(あまのくぬの)	中跡直(なかとのかたむけ)らの祖	
(9)天糠戸命(あまのぬかと)	鏡作連らの祖	
(10)天明玉命(あまのあかるたま)	玉作連らの祖	
(11)天牟良雲命(あまのむらくも)	度会神主(わたらいのかんぬし)らの祖	ニギハヤヒの孫
(12)天背男命(あまのせお)	山背久我直らの祖	
(13)天御陰命(あまのみかげ)	凡河内直(おおしこうち)らの祖	
(14)天造日女命(あまのつくりひめ)	阿曇連らの祖	
(15)天世平命(あまのよむけ)	久我直らの祖	
(16)天斗麻弥命(あまのとまね)	額田部湯坐連(ぬかたべのゆえ)らの祖	
(17)天背斗女命(あまのせとめ)	尾張中嶋海部直(なかじまのあまべ)らの祖	
(18)天玉櫛彦命(あまのたまくしひこ)	間人連(はしひと)らの祖	
(19)天湯津彦命(あまのゆつひこ)	安芸国造らの祖	
(20)天神魂命(あまのかむたま) または三統彦命(みむねひこ)	葛野鴨県主(かどののかも)らの祖	
(21)天三降命(あまのみくだり)	豊国宇佐国造らの祖	
(22)天日神命(あまのひのかみ)	対馬県主らの祖	
(23)乳速日命(ちはやひ)	広沸湍神麻統連(ひろせのかむおみ)らの祖	
(24)八坂彦命(やさかひこ)	伊勢神麻統連(いせのかむおみ)らの祖	
(25)伊佐布魂命(いさふたま)	倭文連(しどり)らの祖	
(26)伊岐志速保命(いきしにほ)	山代国造らの祖	
(27)活玉命(いくたま)	新田部直(にいたべ)の祖	
(28)少彦根命(すくなひこね)	鳥取連(とり)らの祖	
(29)事湯彦命(ことゆつひこ)	取尾連(とりお)らの祖	
(30)八意思兼神の子・表春命(うわはる)	信乃阿智祝部(しなののあち)らの祖	思兼神が天の岩戸
(31)八意思兼神の子・天下春命(したはる)	武蔵秩父国造らの祖	
(32)月神命(つぎのかみ)	壱岐県主らの祖	

ニギハヤヒの子と孫が加わっていることは当然として、天鈿売命・天太玉命・天児屋命など、天の岩戸の中心メンバーが参加していることに注目されたい。

思金命は参加していないが、すでに死去していたのであろう。子の表春命(うわはる)と天下春命(したはる)兄弟が参加している。おなじく天手力男も参加していないが、死去していたか、特別の事情があったのであろう。

いずれにしても、高天原勢力の主力が加わっている。

ほかのメンバーについても、細かく紹介したいが、ニギハヤヒの東遷については、ずっと先の方で詳しく述べることにしているため、今回はこの程度にしておきたい。

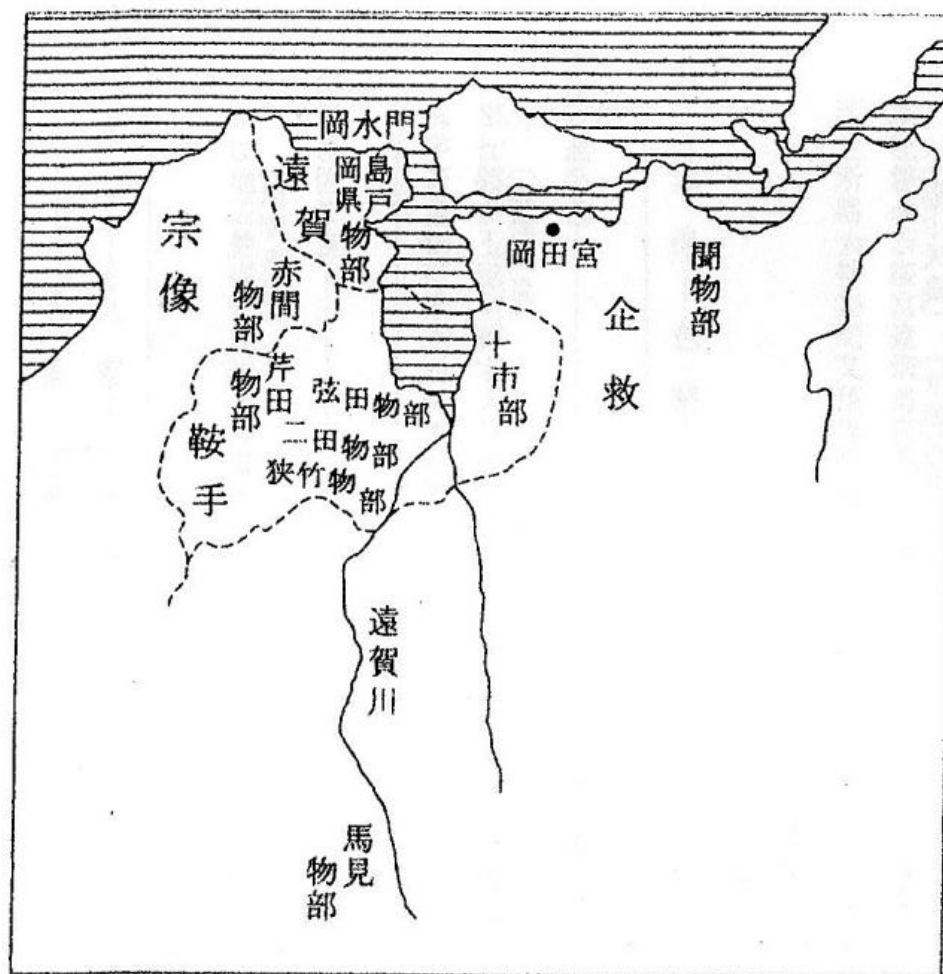
ニギハヤヒの東遷については、鳥越憲三郎氏の『弥生の王国』(中公新書・1994)などに詳しい。

ニギハヤヒが拠点にした領域は下図のとおりとされる。

遠賀川下流域の鞍手郡・遠賀郡の領域である。企救郡・嘉穂郡も一部含まれている。

九州における邪馬台国勢力のいわば最後の前線基地でもある。

先に紹介した後漢・魏晋鏡の出土領域とも重なる。



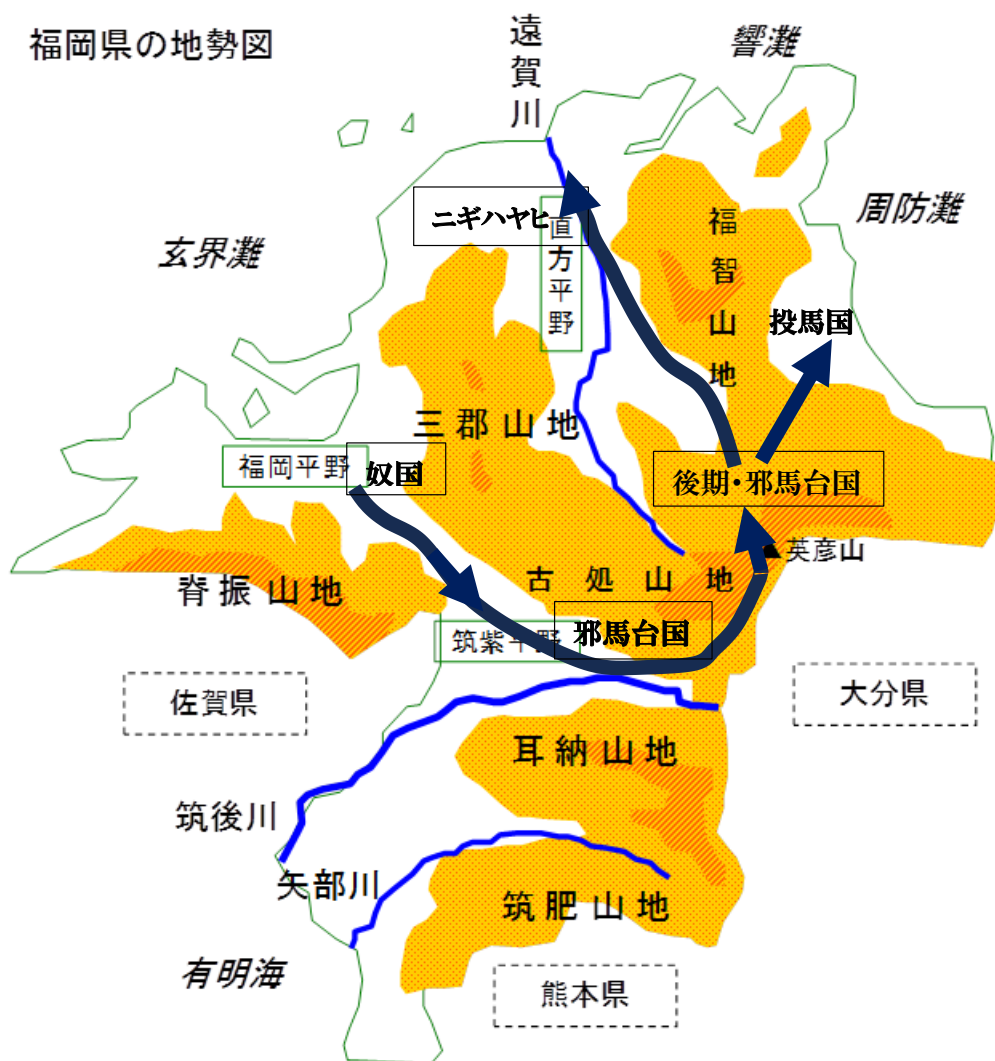


## まとめ

これまで述べてきたことをまとめれば、次のとおりとなる。

	時代	拠点
前2世紀～後170	奴国の時代	福岡平野
170～180	倭国大乱	福岡平野 vs. 筑紫平野
180～247	邪馬台国の時代(卑弥呼)	筑紫平野
248～270	後期・邪馬台国の時代(台与)	豊前・遠賀川流域 遠賀川下流域からニギハヤヒが東遷

奈良・平安・鎌倉・室町・江戸など——時代に応じて都が移動しているように、古代においても、より広大な領地と、より強大な権力を得るために、福岡平野から筑紫平野へ、さらには豊前方面へと拠点を移動した。上の表も、下の図も、その軌跡である。



(以下、次号へつづく)

## 河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ  
九州大学法学部卒  
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長  
福岡県文化団体連合会顧問  
ふくおかアジア文化塾代表  
立花壱岐研究会会員  
元『季刊邪馬台国』編纂委員長  
西日本新聞 TNC 文化サークル講師  
朝日カルチャーセンター講師  
大野城市山城塾講師



### 〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)  
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)  
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)  
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)  
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)  
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)  
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)  
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)  
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)  
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)  
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)  
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)  
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)  
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)  
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)  
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)  
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)  
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

### (テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」  
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演